

退職後を有意義に過ごす

～教育職のキャリアを生かして～

I 研究のねらい

過去の福利厚生部会の研究では、退職後に豊かな人生を送るために重要となる要素として、「健康」「家計」「生きがい」の3点があげられている。また、現職校長にとって退職後を有意義に過ごすためにどのような知識が必要で、退職校長がどのように社会とつながって生き生きと過ごされているかが報告されてきた。

今年度は、退職校長が自らのキャリアを生かしながら、どのように社会に参画していくかや、退職後の人生設計などについて、現職校長及び退職校長へのアンケート調査を実施し、併せて実際に様々な活動を通して豊かな人生を送っておられる退職校長から話を伺う。その集約結果に基づいて、再任用制度が定着する今日において、豊かで充実した退職後の人生を送るためには、どのような準備が必要であるかについて研究を進める。

II 研究経過

- 第1回 平成29年5月30日(火) 研究主題、研究のねらい、研究方法の検討
- 第2回 平成29年6月27日(火) アンケート内容の検討
- 第3回 平成29年9月22日(金) アンケートの集約と結果分析、研究内容の検討
- 第4回 平成29年12月12日(火) 研究のまとめの検討と最終確認

III 研究内容

1 研究方法

現職校長(以下、現職者と表記)と退職された校長(以下、退職者と表記)にアンケートを依頼した。現職者は、全体の4分の1程度の54名に依頼し、53名(回答率98.1%)から回答を得た。退職者は、平成19年3月退職の38名と平成23年3月退職の27名の合計65名に依頼し、55名(回答率84.6%)から回答を得た。

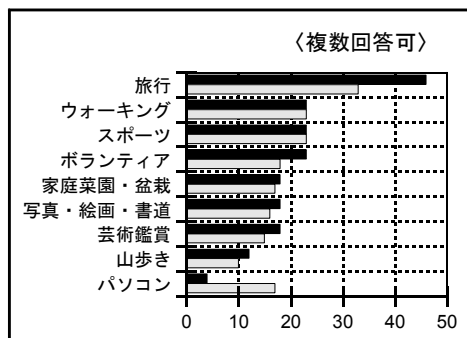
アンケートと並行して、退職者にインタビューを行った。インタビューは、愛知県公立高等学校校長会旧会員の会(以下、旧会員の会と表記)会報やホームページ等で、充実した活動の報告をされている方をお願いし、退職後を生き生きと生活するための手がかりを探るとともに、現職者へのアドバイスをいただいた。

2 アンケート結果

アンケートの回収状況については、前述のように現職者53名、退職者55名と、ほぼ同数であったため、百分率の数字ではなく、実数で比較することにした。グラフは横向きの棒グラフにし、上段(黒)が現職者、下段(グレー)が退職者を表している。

(1) 退職後の過ごし方について[図1]

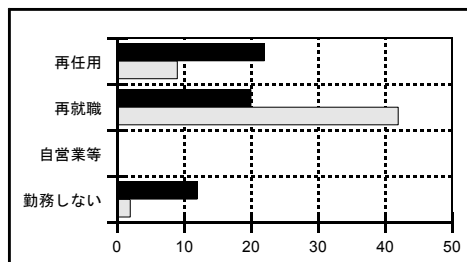
現職者・退職者ともに「旅行」という回答が最も多かった。他には、「ウォーキング」や「スポーツ」といった身近で、かつ健康増進につながる活動が多かった。多くの項目で現職者・退職者の回答数にさほど差は見られなかったが、パソコンでは4名・17名と大きな差があった。また、自由記述には「シャンソン教室」「囲碁・将棋」「障害児等の相談員」「骨董収集」「釣り」「国外移住」などがあった。



[図1] 退職後の過ごし方(現職者は予定)

(2) 退職後の勤務形態について

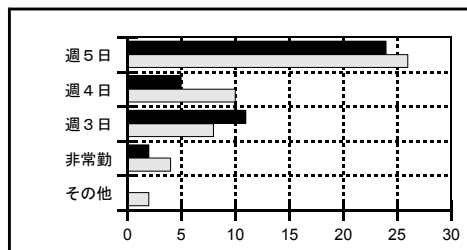
「再任用」は、公立高校や教育委員会等での勤務、「再就職」は、大学や営利企業等での勤務という注釈をつけてアンケートを行った。



[図2] 1年目の勤務

① 1年目の勤務について[図2]

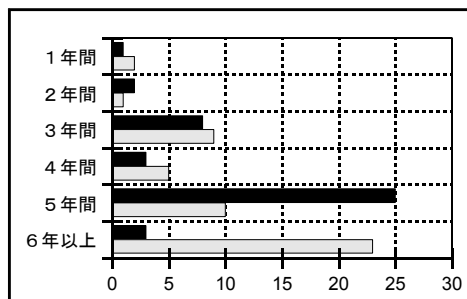
現職者では「再任用」「再就職」との回答がそれぞれ4割で、「勤務しない」との回答が2割であった。退職者では「再就職」との回答が8割を占めた。「自営業等」はどちらもいなかった。



[図3] 勤務日数

② 勤務日数について[図3]

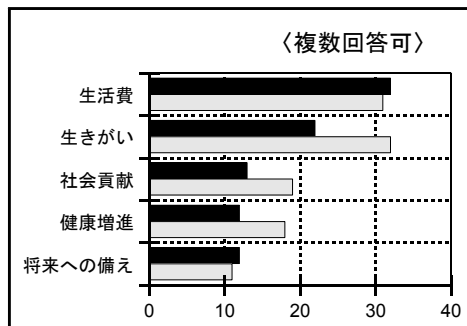
現職者では、何らかの形で勤務すると回答した42名中24名が「週5日」のフルタイム勤務を予定しており、退職者は勤務していると回答した51名中26名が実際に「週5日」の勤務をされていた。また退職者で「週4日」勤務が8名おり、実際には退職後にもかなりの方がフルタイムに近い形で勤務を続けていることが分かった。



[図4] 勤務年数

③ 勤務年数について[図4]

現職者では「5年間」との回答が多く、年金支給開始年齢にもよるが、65歳を一つの区切りと考えていることが伺える。退職者では「6年以上」が多く、5年を過ぎても勤務を続けているケースが多かった。



[図5] 再任用・再就職の理由

④ 再任用・再就職の理由について[図5]

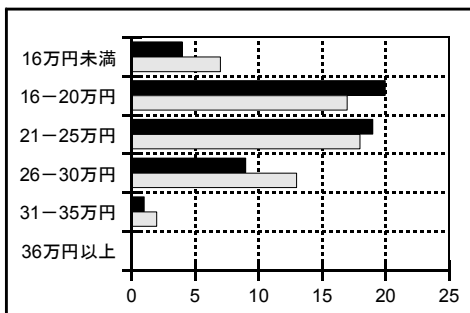
現職者で「生活費」との回答が最も多く、退職者では「生きがい」「生活費」の順ながらほぼ同数で多かった。実際に退職後を過ごされている方は、単に「生活費」だ

けのために働くのではなく、意識の中でも充実した活動ととらえていることが伺える。我々も退職後の再雇用について前向きにとらえる必要がありそうだ。

(3) 退職後の生活費等について

① 必要な生活費(月額)について[図6]

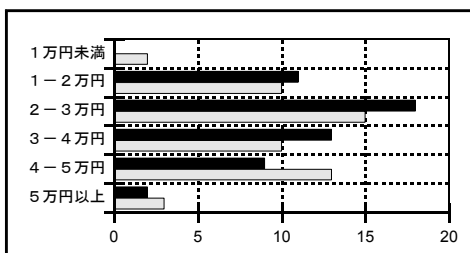
アンケートでは「1人あたりの額」で回答をいただいた。現職者では「16-20万円」、退職者では「21-25万円」が最も多いが、ほぼ同数であった。また、退職者で「26-30万円」という回答も多かった。夫婦で必要な1人分というコメント付での回答もあったが、1人あたりの生活費の算出方法が難しいケースがあったかもしれない。



[図6] 必要な生活費(月額)

② 趣味のための支出(月額)について[図7]

「2-3万円」が最も多いが、「1-2万円」や「3-4万円」も高い数値を示している。また、退職者では「4-5万円」という回答が2番目に高い結果となった。

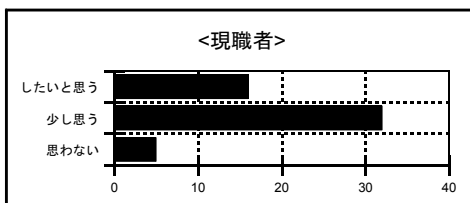


[図7] 趣味のための支出(月額)

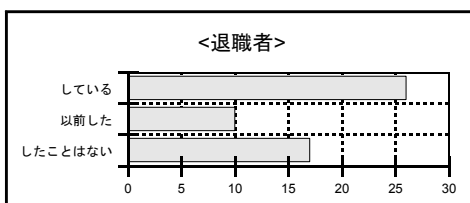
(4) ボランティア等について

① ボランティア等への取組について[図8-1、2]

現職者には、ボランティア等を行う予定を質問し、退職者には、実際にボランティア等を行ったかを質問した。現職者では、「したいと思う」と「少し思う」を合わせると、9割以上がボランティア等への意欲を示しているのに対し、退職者では、3割の方が「したことはない」との回答だった。ただ、退職者の6割の方はボランティアの経験があり、半数以上の方が現在もボランティアを継続されていることも分かった。



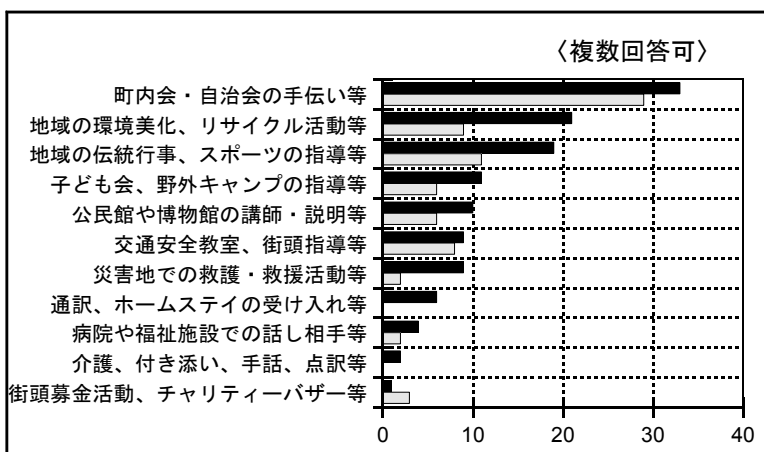
[図8-1] ボランティアへの取組



[図8-2] ボランティアへの取組

② ボランティアの内容について [図9]

現職者・退職者ともに「町内会や自治会等の手伝い、まちづくり等」が最も多い回答となった。また、現職者では、「地域の伝統芸能・伝統行事、祭り、スポーツやレクリエーションの指導等」と「地域のゴミ拾い等の

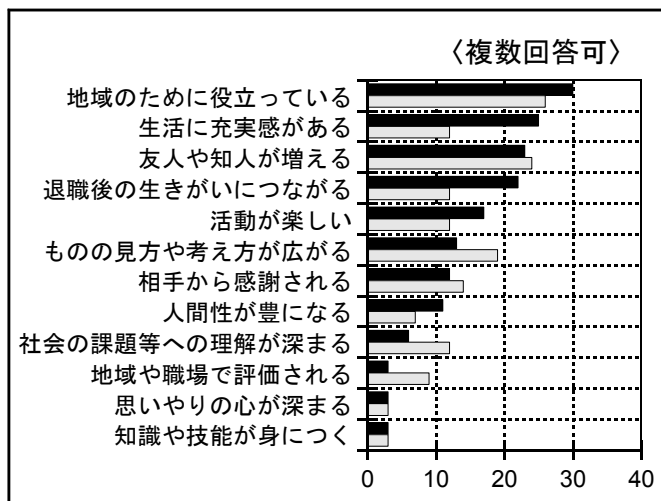


[図9] ボランティアの内容

環境美化、リサイクル活動、野生生物・植物等の保護活動等」が高い数値を示している。身近なところからボランティアに取り組もうという姿勢が感じられる。

③ ボランティア等の感想について[図10]

現職者には、退職後のボランティア等に対する予想、退職者には、実際にボランティア等を経験した感想を伺った。回答数の多い項目では、現職者・退職者に共通した項目もあるが、現職者が予想している項目と退職者が実感している項目に開きのあるものが幾つかあり、実際にボランティア等を経験してみて、退職者が幅広く具体的な感想をもたれていることが分かった。また、グラフには載せて

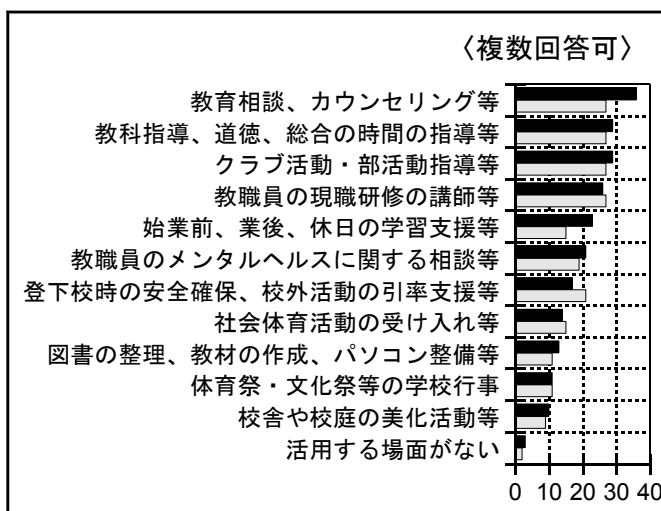


[図10] ボランティア等の感想 (現職は予想)

いないが、退職者からは「自分の時間が少なくなる(5名)」や「経費(お金)がかかり過ぎる(1名)」、「継続的に活動ができない(1名)」という回答もあった。

④ 退職校長による教育支援ボランティアの可能性について[図11]

現職者・退職者の結果がほとんど一致しており、学校の教育活動に対する退職校長による支援の在り方が示されている。退職校長には、「教育相談」「総合的な学習の時間」「部活動」「現職研修の講師」等の分野で、それまで蓄積してきた経験を生かして教育現場をサポートしていくことが望まれている。



[図11] 退職校長による教育支援ボランティアの可能性

3 インタビュー

退職された校長の中で、生き生きと退職後を過ごされている方にインタビューを行うことで、現職者の参考にしようと考えた。主に「旧会員の会」ホームページをもとに3名の方を選ばせていただき、研究員が分担してインタビューを行った。

(1) 水野昭彦先生(73歳)平成17年3月退職

① ボランティア活動の内容

豊橋市の姉妹都市である米国トリード市からの大学留学生を、これまで数回ホームステイ先として受け入れてきた。同様に地域高校生のトリード市派遣について生徒選考、事前研修における講師、引率教諭の地区校長会での依頼等に関わる。さらに豊橋市国際交流協会に属する豊橋日仏サロンを12年前に発起人代表として立ち上げ、フランス文化との交流活動を年4回企画、

運営している。

② ボランティア活動を始めたきっかけ

30年程前、豊橋市国際交流協会のインターナショナルフェスティバルに一係員として夫婦で関わった。その縁で知り合った留学生をホームパーティーに招いたことが発展し、個人的にホストファミリーのような活動をするようになった。また、校長在職中にトリード市の高校との姉妹校提携調印に立ち会い、仕事で学校間の国際交流に関係するようになった。

③ ボランティア活動の魅力(勧め)

家に招いていた夫婦の留学生に子どもが生まれ、数年後にオーストラリアへ帰国。その子どもが成長、結婚をして新婚旅行で日本に立ち寄った。親子二代にわたるホームステイとなった。



④ 退職後を生き生きと過ごすために、後輩へのアドバイス

退職後は「自分の時間は贅沢に自分で使う」と考えていた。ところが縁あって大学で週2日教えるようになった。そこで大学教授から福沢諭吉による西洋式簿記書の現代語訳を全部やってみたらと言われ、週1日を語訳の時間に充て5年をかけ完成させた。残りの4日は趣味等の時間として旅行、山歩き、書道、インターネット、フランス文化等を楽しんできた。今もこれらの趣味を生かす形でボランティア活動がつながっている。退職後10年近く働く時代であるが、「働くこと」「趣味」がなければ1日の大半の時間をどうやって過ごすか、自分で考え出さなくてはならない。これはこれで大変なことであると思う。

(2) 寺澤仁史先生(70歳)平成20年3月退職

① ボランティア活動の内容

名古屋城での観光ガイドボランティア。月に3～4回で、予定は2～3か月前に分かる。会員は全員で80名で、8班に分かれて活動しており、1回500円の交通費が支給される。観光客の要望を受けて、80～90分一緒に敷地内を周りながら説明をする。団体は事前に予約されているが、個人は当日受付するが多い。

② ボランティア活動を始めたきっかけ

元々文化財を見ることが好きで、同じ趣味をもつ人と楽しみを共有したいと思っていた。校長退職後の清洲貝殻山貝塚資料館勤務時代に、土器や火おこしなどの説明に対する来客の反応が楽しく、ガイドのようなことがしたいと思うようになった。また、現職時代に愛知県高等学校郷土史研究会に入会し、郷土史が好きになったこともきっかけとなった。



③ ボランティア活動の魅力(勧め)

お客様からいただく感謝の言葉で苦勞が報われる。ガイドをするには勉強が必要であり、本を読んだり、他の城を見学に行ったりすることがあるので、探究心が生まれ、また各地を訪ねることで生きる力が湧いてくる。ガイド仲間には民間企業出身者が多く、学校とは違う世界の

話を聞くことができるので、その仲間との交流が刺激にもなっている。ボランティアをやってよかったと思っている。

④ 退職後を生き生きと過ごすために、後輩へのアドバイス

退職後は楽しまなければいけないが、楽しみの内容が問題である。好きなものがあれば、そこを糸口にして広がっていくので、現職中に心の片隅に置いておくことが必要。自分の教科の分野を糸口にして広げていくのがよい。人のために何かやれると、より一層満足感が得られる。

(3) 壁谷宜男先生(69歳)平成21年3月退職

① 「愛山会」の活動内容

旧会員の会の活動に「愛山会」というグループがあり参加している。「愛山会」は、年に4回(春2回、秋2回)の山歩きを計画している。愛知県内の山を中心に、東海地区の他県に向かうこともあり、行き先については、高齢者でも実施可能な山を担当幹事(4名)が各々考えて決めている。日帰り、10名から多くても20名程度で実施している。



② 山歩きを始めたきっかけ

現職の頃から山登りは行っていたが、杉浦常夫先生(平成10年3月退職)に誘われて「愛山会」の活動に参加するようになった。

③ 活動の魅力(勧め)

出欠を取るのでもなく、朝集まったメンバーで行くというのが気楽でいい。80歳を超える方も参加してみえるが、雄大な自然と向かい合える楽しみがある。また、終わった後に参加者で軽く祝杯をあげるのも楽しみである。

④ 退職後を生き生きと過ごすために、後輩へのアドバイス

元々山歩きは趣味で行っていたが、日頃からトレーニングも行い、山歩きに備えているので、健康の維持向上になっている。また、東三河柔道協会に所属し、蒲郡市内で少年柔道の指導を週2回行っている。柔道は、現職の頃から部活動の顧問をしていたので、その延長で今でも柔道を続けている。健康であることのありがたみを感じている。

IV 結び

アンケートの結果、多くの退職者が、退職後に「生きがい」をもって、充実した日々を送っており、退職後も生活のためだけでなく、「健康増進」や「社会貢献」といった意識をもって「再任用・再就職」を行っていることが分かった。現職者も退職後の楽しみについての回答が多岐にわたり、重責を果たした後の展望が伺えた。

退職者によるボランティア活動等については、その内容が身近なものから専門的なものまで幅広く示唆に富んだ回答をいただき、現職者にとっては退職後にどのような活動をするかの目安となり、退職に向けて準備をしていく参考となった。

最後に、アンケートにお答えいただいた退職者・現職者の皆様に感謝して結びとする。